

日本の禪語録
一

榮西

古田

日本の禪語録
一
東西

古田紹欽

日本の禪語録 第一卷

榮西

定価 一八〇〇円

昭和五十二年九月一日 第一刷発行

著者 古田紹欽

企画編集 株式会社 講談社出版研究所

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二—二二二

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三) 九四五—一一二(大代表)

振替 東京八一三九三〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

©古田紹欽

一九七七年

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

日本の禪語録一
栄西

はじめに

鎌倉仏教を取り上げるに、多くの場合親鸞・道元・日蓮のトリオを挙げる。それにはそれなりの理由があつて、あえて間違いとはいわない。浄土仏教は親鸞に、禅仏教は道元に、法華仏教は日蓮によつて確かに代表されよう。しかしその見方が鎌倉仏教のすべてを尽くすものと誤認してはならない。

大体、鎌倉新仏教の「新」ということが、一般的通念となつて提唱されたに並行して、このトリオがクローズアップされた。果たして鎌倉仏教の実体をこの通念に従つて「新」の角度からのみ捉えていいであろうか。また、その「新」の特質を教義の択一性からのみ見て、妥当性があるであろうか。

時代的には平安の後に鎌倉は起こつた。そして平安になかつた新しい「宗」の独立が新しい時代の鎌倉に唱えられた。その点、時代の上にも、唱えられた教義の上にも「新」があつたことはいふまでもない。

ただここで注意しなくてはならぬのは、「宗」の独立がどのような過程を辿つたかであり、その独立が可能となつた背景には、いくつかの前の段階があり、またそれをなし遂げた後の段階もこれまたあつたことである。

「新」といえば当然「旧」が予想されるが、新も旧も共に同じ仏教間のことであつてみれば、それは本質的に別なものであらうはずはなく、もしそれを「新」というならば、その時代と人にとに適合し得

た新しさに外ならず、時機相応ということに外ならない。その限りでは時代と人との間に生きて伝わった仏教は、常になんらかの新しさをもっていたといえる。

鎌倉仏教を「宗」の独立の事象にだけ焦点をあてて、「新」の突然変異がそこにあったように見るべきではなく、新しい宗が起ったことの事実は新宗に違いないが、その「新」をもつて、しかも仏教そのものの本質が、旧から新にそのことによつて変異をなしたと考えるはならない。こういうことをいったら軽率のそしりを免れないかも知れないが、一宗の標榜は一種の仏教の看板をかけるようなものであり、新しい一宗の独立といつても従来のにあった仏教のその看板を大きく書き換え、またその掲げ方を工夫し、一層人目につきやすくしたようなものであり、看板を書くことも、それを掲げて人目につきやすくするように訴えたりすることも、従前からあったことであり、なにも鎌倉になつて初めて発見した新知識ではなく、奈良・平安の仏教もそれぞれの時代にアッピールにつとめ、教化を旺んにしてきたのであり、時代への適応を決してしなかつたわけではなく、常に新しさを目指したことは、鎌倉仏教の場合となんら異なることはない。ただその場合、鎌倉仏教が扱一主義を目指したのと違つて、複合主義を強調する必要もあつただけのことであり、大体、奈良・平安の仏教は複合主義が時代に適応性をもつたと考える。それというのは、仏教が学問として受け容れられた要素が少なくなつたためである。

浄土仏教も禅仏教も、また法華仏教もその程度の差こそあれ、共に奈良・平安の時代にすでに我が国に伝わつて行なわれた。その限りでは親鸞、道元、日蓮によつてこれが初めて唱えられたものとは

いえない。

ここでは問題を限って言えば、禪の中国よりの伝来は奈良・平安の時代にすでにあった。道元において突如として伝わったのではないことは、改めてここで断わるまでもない。鎌倉の同時代には栄西によつてれっきとした臨済禪の黄竜派が伝わった。ただし栄西は禪に併せて円・密・戒すなわち天台、真言を併せ説き、戒律の復興につとめ、いうならば複合仏教を標榜することをもって、日本仏教の中心を図った。そのことが栄西にとつては時機相応の教えであつたのであり、新しい仏教の有るべき有り方の主張であつたのであり、そのことはその主著『興禅護国論』を見ればおおよそ明らかである。

もちろん、既成の仏教勢力のなかに新しい別の勢力が擡頭することについては、既成勢力からの圧迫があつたことは、それによつて利害が別れるとなると利を守るために当然起こらう。栄西の禪はその意味では南都からも叡山からも攻撃を受けた。勢力と勢力とがぶつかることになれば、それをどのようにして調整するか配慮が、殊に圧迫される側からあつて不思議はなく、もしそれを妥協というのであつたら、現実を肌でもって感じ取らない抽象論という外はない。

いいたいことはまだまだあるが、つまるところは親鸞・道元・日蓮のトリオで鎌倉仏教を勘定してはならないということにつきる。親鸞の浄土仏教は先行する法然あつてのことであり、道元の禪仏教は栄西あつてのことであり、日蓮の法華仏教は叡山の法華仏教あつてのことであり、親鸞・道元・日蓮だけが注目されていいわけではない。

扱一か複合かということについても、扱一仏教が鎌倉仏教の唯一の特質ではなく、栄西的複合仏教

とは性格を異にするが、一遍の浄土仏教が三人のトリオの後の段階として現われていることを見落としてはならない。一遍の浄土教は択一主義を超える全仏教的なものとして現われてくるのであり、択一主義の観点から一遍の浄土教を欠落させるようなことがあつてはならない。

新旧の対比からする「新」の魔力に魅せられ、鎌倉仏教の本質を択一仏教としてのみ捉えることは大いに警戒を要する。

『興禅護国論』にしても『喫茶養生記』にしても、叙述はスマートでなく、択一仏教の主張に見られるように論旨に一本筋の通ったものがなく、なんとなくたまたまとしたところがあつてスラリとしなが、柴西は自らの主張を、あえてスラリとした論旨で片づけなかった。あまりにも柴西の場合は、時代にあつていうべきものが多かった。そこに柴西のこの『論』にうかがわれる煩瑣な仏教論があり、専門外の喫茶の論までがなくてはならなかった。

柴西は二度までも入宋を遂げた時代の進歩的知識人であつたのであり、この人が時代に対する新しい認識と感覚とをもつていなかったはずはなく、択一か複合かの尺度をもつて、その複合主義をいかに「旧」と断じてはならない。

ともあれ、この柴西集を先入主をもつてせず、虚心に読むことである。

目次

はじめに……………3

● 栄西 新時代の先駆をなした禅者……………11

一 栄西の生涯……………13

二 その人間像……………36

三 『興禅護国論』をめぐって……………44

四 『喫茶養生記』をめぐって……………61

● 現代語訳（読み下し文・脚注つき）……………77

凡 例……………78

興禅護国論……………79

興禅護国論〔序〕……………81

興禅護国論 序……………92

興禅護国論 卷の上……………100

卷の中……………167

卷の下……………233

未来記……………296

喫茶養生記

301

喫茶養生記 序

303

喫茶養生記

巻の上

307

巻の下

324

原文

..... 343

興禅護国論

345

喫茶養生記

385

おわりに

399

年譜

401

題字 古田紹欽

栄 西

新時代の先驅をなした禪者

一 栄西の生涯

七十五歳の生涯

栄西えいさいの伝をここでぐだぐだしくいうことはやめよう。およそ伝というものは私自身にとつてもそうであるが、一般の読者にとつても四角四面のことを縷々もろもろとして述べてもそう興味のあることではない。伝といえは出生から終焉に至るくさぐさの出来事を、もつともらしく大仰に記して述べるのが通例であるが、考えてみればくだらぬことである。

伝は簡單明瞭に年譜のようなかたちで手取り早くて端的に、しかも便宜に述べるに如くはなからう。ついてはこの稿の終わりにその略年譜を掲げて、栄西伝はこれに尽きるとしたい。

それにしても、人の伝を顧みて、つくづく思うことは、人運、時運である。それが大きくその人の一生を左右し、好運、不運が期せずしてその浮沈を決定づけ、ひいては成功、不成功までを意義づけるのであるから恐ろしい。

栄西はその運のどちらを辿ったかという点、少なくとも少年時代は恵まれた環境に育ち、当時としてはエリート・コースを歩んだ。叡山に登って出家、受戒して仏教の学問修行をし、性来学問好きでもあったことから、俱舍論くしゃろん、婆沙論はしゃろんなどといった仏教の基礎的知識を早くに学んだ。そして究極的に

は天台の教義を学び、天台密教を身につけるべく、就くべき師を求めるに及んで、得難い師の縁に恵まれた。

そして成長しては入宋まで志し、それを達することにもなった。栄西が七十五歳で没した年の建保三年（一二二五）に著わした『入唐縁起』のなかで、若き頃入宋を志したことについて述懐し、自分が入宋を志し、その志をとげたのは成尋阿闍梨^{じやうじやうあじかり}、あるいは三河入道寂照以来のことであると、成尋の入宋より数えて七十八年、寂照のそれより隔たること百四十九年であったとし、久しく絶えてなかった入宋を計ったものであったことをいささか自負している。

入宋を可能にしたもの

栄西が初めに入宋したのは仁安三年（一一六八）四月、二十八歳のことであるが、一体どうした機縁からそうした運びとなったのであろうか。栄西の出生は備中の吉備津宮^{きびつぐみ}の一神官の子としてであったといわれ、別に富裕な家庭に生まれ、育ち、成人したというわけではない。たかが一神官の伴として生まれ、叡山に登って出家をなし得たことさえもなにかのつてがあり、それに伴う経済的な裏付けがなくては叶わぬことであつたろうが、こともあろうに入宋を志し、それを達し得たことは、当然それに要した経済的な莫大な額に及ぶ費用の調達なり、保証がなくてはならなかったことはいうまでもない。それをどうして賄ったのであろうか。

このことに関しては、どの栄西伝も極めて易々として、それが果たされたごとくに記しているが、